UNVEILLING 'RARE' USAGES IN THE HISTORY OF ENGLISH

（英語の歴史における「稀有な」語法の隠れた真実）

博士論文全文の要約

中村不二夫

論文構成

第 I 章　序論 非文学テキストの英語史研究への貢献（pp. 1-25）
第 II 章　三人称単数現在主語に呼応する don't の歴史（pp. 26-86）
第 III 章　有生または人をあらわす主語も持つ能動受動進行形の歴史（pp. 87-102）
第 IV 章　分詞の進行形の歴史（pp. 103-117）
第 V 章 「～のふりをする」をあらわす seem の歴史（pp. 118-138）
第 VI 章　Not 後置型現在分詞、動名詞の歴史（pp. 139-420）
結論（pp. 421-425）
注（pp. 426-444）
調査史料一覧（pp. 445-459）
参照文献（pp. 460-470）

第 I 章　序論 非文学テキストの英語史研究への貢献

英語を学び始めて間もない頃、tooth の複数形が teeth であるなら、なぜ roof の複数形は reef でないのか、疑問に感じていた。しかし、大学生になり Oxford English Dictionary (OED) を引くようになり、その疑問が解決した。歴史の途上には reef が、man の複数形として mans が、surprise の名詞形として、arrival, refusal のように surprisal も存在していたことを知り、妙に嬉しくなったことを記憶している。歴史の中では、ありえそうな語法が確かに存在していたこと、ただ一般化するまでには至らなかったことを OED は教えてくれた。統語論の観点からは、古い英語には、現代英語の観点から予期せぬ語法が存在していた。たとえば、現代英語の挿入節は肯定を含意する形式をとるものだが (I think, I dare say など)、"1765 T. Gray, L26, II 678, I am neither sorry, nor glad, for M: (*I doubt*) will scarce succeed to his Prebend." は、否定的意味でもかまわなかったことを物語っている。また、"1849 T. H. Huxley, D35, 174, Dreamy parables *do* these waves murmur in one's ears. [T. H. Huxley: a great scientist, born and raised at Ealing and Coventry (*ODNB*)]" は、17 世紀初頭に衰退したと考えられている使役の do が 19 世紀半ばでも使われていたことを示している。

このように、非文学テキストを調査すると、英語史の定説に反する史実にたびたび遭遇する。そのような理由から、筆者は、大学院修士課程在籍時に、文学作品の言語を対象に変化・無変化を記述・説明することが中心であった伝統的英語史研究ではなく、一貫して非文学作品の言語分析を通して文法、形態、語彙の歴史を正すことを研究課題に決めた。以来 37 年の歳月が経過した。一口に非文学テキストといっても多々あるが、筆者が扱ってきたのは、主として 1500 年－1900 年に書かれた、出版を意図されていない個人の日記と私的な書簡史料である。これらのテキストタイプの史

料を調査対象にしてきたのは、次の 5 つの理由からである。

(1) a. 言語変化の最前線を知る
b. 消滅したはずの語法が存続しているかどうかを探求する
c. 語法の時代的欠落を補う
d. 未知または稀有な語法を発掘する
e. 語法に対する当時の生の証言を収集する

本論文は、筆者のこれまでの国際会議等における発表と公刊した論考の中から (1d) に関連する研究に焦点を当て、歴史的に稀有であると信じられてきた語法の中には、実際には稀有とはいえない語法もあることを示そうとした論文である。とりわけ、国際英語史会議 (International Conference on English Historical Linguistics)、後期近代英語に関する国際会議 (International Conference on Late Modern English)、ヨーロッパ言語学会 (Societas Linguistica Europaea)、ポズナン言語学会 (Poznan Linguistic Meeting)、ヘルシンキ大学 VARIENG 研究所ゲストレクチャー、ケンブリッジ大学コロキアム、名古屋大学 21 世紀 COE プログラム国際会議招待発表、近代英語協会におけるシンポジウムと個人研究発表、およびそれらの論考を発展させた論文である。

第 1 章では、序論として、上の (1a-e) のそれぞれが、用例提示とともに概説される。

まず、(1a) の語句レベルの刷新として、分詞形容詞 lowering の初出は、OED によれば 1895 年であるが、(2a) が示すように、S. Pepys の日記には 2 世紀以上古い使用が認められる点、「もう少しで～しそうである」の意味の be near Verb-ing 形は、(2b) のように、OED の初出よりも 1 世紀以上古い例が房をなして使用されている点等が実証されている。

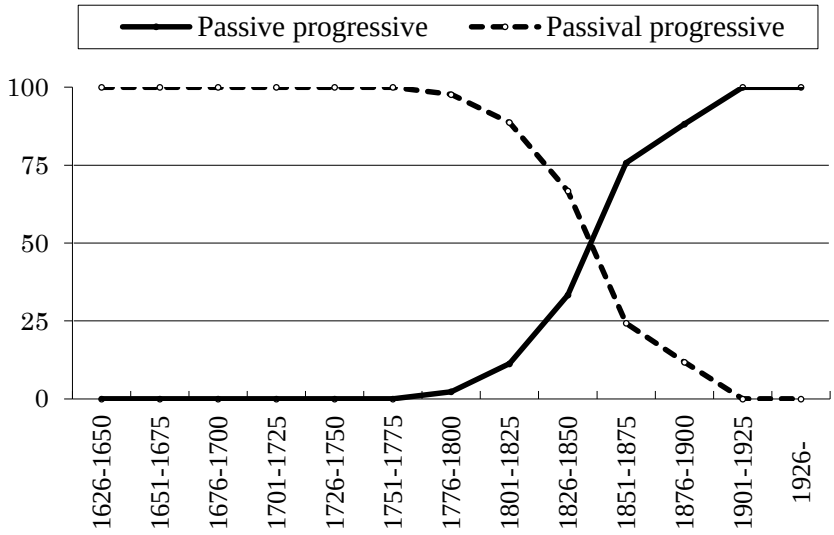
(2) a. 1669 Pepys, D10, IX 540, At noon home to dinner, and there find my wife extraordinary fine with her flowered tabby gown that she made two years ago, now laced exceeding pretty, and endeed was fine all over - and mighty earnest to go, though the day was very *lowering*,
b. 1653 D. Osborne, L4, 78, Poore Mrs Fretcheville *is neerer being* mad then ere she was in her life, | 1653 D. Osborne, L4, 85, I *was* as *neer Laughing* Yesterday where I should not; | 1659 S. Pepys, L7, 15, one . . . *was* very *neere having* his braines knockt out with a brick batt . . . | 1662 J. Evelyn, D9, III, 318, the bloud *was neere breaking* the vaines,

統語レベルの刷新としては、否定平叙文において周辺的助動詞 need to-不定詞が助動詞 do と共起する構造が定説よりもほぼ 2 世紀古く使われている事実 (3a)、受動ないしは使役の have の進行形がこれまで最古と考えられている用例よりも半世紀古く使われている事実 (3b) が報じられている。

(3) a. 1663 S. Pepys, D10, IV 353, we have concluded to have him have a lodging elsewhere, and that I will spare him 15*l* of his salary; and if I *do not need to keep* another, 20*l*. | 1666 S. Pepys, D10, VII 26, only after I was in the house, heard a great dog bark and so was afeared how I should get safe back again, and therefore drew my sword and scabbard out of my belt to have ready in my hand - but *did not need to use* it, but got safe into the coach again. | 1681 C. Morelli, L5, 119, You *doe not need to lodge* att a In, . . .
b. 1790, J. Woodforde, D21, III, 172, After breakfast, whilst the Ladies *were having their Heads dressed* &c. I walked out into the City and paid the following Bills to my Tradesmen.

さらに、be being PP 型受動進行形の確立は、Visser (1973) の主張する 1900 年頃ではなく 1820-1850 年であることが、150 冊を越える日記･書簡史料の網羅的調査・分析から得られた次の表とグラフを根拠に述べられている。

Period	Passival progressive	Passive progressive
-1600	2	0
1601-1625	1	0
1626-1650	5	0
1651-1675	85+ +1	0
1676-1700	43	0
1701-1725	46	0
1726-1750	19+1+1	0
1751-1775	34+4+2	0
1776-1800	43+1	1
1801-1825	55+1	7
1826-1850	44+1+2	22
1851-1875	35	109+7
1876-1900	9	67+1
1901-1925	0	71+1
1926-	0	77+1



このように、上記以外の項目も含め、私的な日記・書簡のように ‘common and informal’ な言語レベルでは、言語変化が早く生じていたということが実証されている。

次に、(1b) について、OED により 14 世紀末にのみ用例が確認されている be busy to-不定詞の構造が、(4) のように、17 世紀中頃過ぎの日記に房をなして使われている点が報告されている。

(4) 1660 Pepys, D10, I 64, To my father’s to dinner, where nothing but a small dish of powdered beef and a dish of carrots, they *being* all *busy to get* things ready for my Brother John to go tomorrow. | 1660, I 101, 1660, I 112, 1661, II 179, 1663, IV 348, etc.

このほか、1600 年頃に消滅したといわれている使役の do の用法が 19 世紀中頃の日記に使用されて

いる点、18 世紀半ばを境に消滅したといわれている I not say 型否定平叙文が、18 世紀－19 世紀日記・書簡史料においても根強く使われ続けている点、助動詞 do を用いない肯定疑問文 How do you?, What say you (to ~)?, What think you (of ~)? が後期近代英語期の日記・書簡史料においても根強く残存している点が指摘されている。

(1c) の例としては、be busy (in) Verb-ing 構造、本動詞 have の進行形が取り上げられ、日記・書簡史料は他家の収集した用例の著しい時代的間隙を埋めることに貢献できることが示されている。

未踏の史料を分析すると、未知の、あるいは稀有な語法に出くわすことがある。用例が少なければ昔はそのような語法もあったのだと軽く扱うこともできるが、多々出現した場合は放置することはできない。本論文においては、(1d) の例として、3 人称単数主語に呼応する助動詞 don't の語法、a drunken boy was carrying by our constable のような、有生の名詞主語に続く能動受動進行形、being going のような分詞の進行形、「～のふりをする」の意味を有する seem の用法、否定辞 not が後続する現在分詞・動名詞の語法が第 II 章―第 VI 章において詳述されることが予告された後、これまでその使用が Poutsma (1926) による 1 例しか報告されていない擬似助動詞 be coming to-不定詞の語法が、(5) のように、17 世紀－19 世紀日記・書簡史料に 6 例確認されたことが報じられている。

(5) 1661 Pepys, D10, II 213, it raining very hard, I went home by Coach, with my mind very heavy for this my expenseful life; which will undo me I fear, after all my hopes, If I do not take up - for now I *am coming to lay out* a great deal of money in clothes upon my wife, I must forbear other expenses. | 1665 Pepys, D10, VI 211, it is said that . . . our Lord Treasurer cannot tell what the profits of Chimny money is; what it comes to per annum - nor looks whether that or any other part of the Revenue be duly gathered as it ought - the very money that should pay the City the 200000*l* they lent the King being all gathered and in the hands of the Receiver, and hath been long, and yet not brought up to pay the City, whereas we *are coming to borrow* 4 or 500000*l* more of the City - which will never be lent as is to be feared. | 1770 T. Gray, L26, III 1121, I am coming to see you, my good Friend, that is, on Monday se'nnight I mean to call on Palgrave for a few days in my way to Blundeston. | 1829 J. Ruskin, L51, I 211, If I am now to resign this Labour . . . I *am coming to resume* a closer a sweeter Intercourse with my Love | l832 S. Palmer, L48, I 59, In the fiery trial which *is coming to prove and purify* the Church, may he be never daunted or dismayed, | 1863 S. Palmer, L48, II 678, I *was coming to see* your distant Rome this morn^{g} . . . you kindly promised to show me but was prevented by the 'Salmon engagement' into which I was unwilling to intrude. If possible, I must try to see your picture but I can seldom get over.

最後に、(1e) に関し、日記や書簡が、文法書とは趣の異なる、その当時の語法に対する書き手の生の証言を収集するのに格好の史料になり得ることが例証されている。たとえば、cow の複数形 kine と cows に関し、19 世紀後半のイングランドとウェールズの境界地域では、今日の英語では古語法となった kine の使用が世代を識別するリトマス試験紙となっていたことを伺わせる F. Kilvert の貴重な証言 (6a)、オックスフォード大学で神学博士の学位を取得した W. B. Stevens が、なぜ will not の縮約形は、can't (<can + not), shan't (<shall + not)のように win't にならないかいぶかしく思う心情を、自身の日記に吐露している点 (6b)、ダブリン大学とオックスフォード大学の両方を卒業した文

豪 O. Wilde でさえ、助動詞 will と shall の使い分けに不安を覚えると洩らしていた点 (6c) 等が紹介されている。

(6) a. 1872 Kilvert, D36, II 298, Dame Matthews used to live at the Home Farm at Langley Burrell. She was a member of the family, but she must have lived a long time ago, as Mrs. Banks remarked, because she called cows 'kine'

b. 1793 W. B. Stevens, D22, 66, We vulgarly say 'It 'aint so' and 'I wont', but the proper contraction from 'It is not' should be 'It isn't'. Perhaps it arose from a barbarous confusion of numbers and 'You are not well' I fear may easily yield 'You arn't', 'You a'nt', 'I cannot', 'I can't', 'I may not', 'I maynt', 'I shall not', 'I shan't'. All this is regular then why should 'I will not' make 'I won't', instead of 'I win't'? The Clowns in this country say--'I canna', 'I shanna' and 'I wonna do 't' for 'I cannot', 'I shall not' and 'I will not do it'.

c. 1894 O. Wilde, L58, 124, I return corrected proofs. The title-page, dedication, play-bill etc. have not yet come . . . I wish the reader would go through the play once and correct any slips in the use of "will" and "shall"—my use of the words is Celtic not Saxon

以上のように、第 1 章では、長い伝統を有する英語史研究にあっても、未踏の日記･書簡資料を分析すれば、21 世紀初期の今日においてさえ、主として文学作品の言語研究に依拠してきた従来の英語史研究を補完する形で英語史実の修正に貢献できることが実証されている。

第 2 章から第 6 章においては、序論で指摘だけに止められていた、3 人称単数主語に呼応する助動詞 don't の語法 (第 2 章)、有生の主語が先行する能動受動進行形 (第 3 章)、分詞の進行形 (第 4 章)、「～のふりをする」の意味を有する seem の用法 (第 5 章)、否定辞 not が後続する現在分詞・動名詞の語法 (第 6 章) が、詳述されている。

第 II 章　三人称単数現在主語に呼応する don't の歴史

かつて、アメリカ合衆国の人気歌手に The Carpenters という兄妹がおり、その歌詞の中に he don't care という一節があった。ポピュラーソングゆえ許容される語法なのであろうと軽く考えていたが、第 II 章の研究を通して、この語法には深い歴史が含まれていることを知ることとなった。

助動詞の否定辞縮約形の歴史に関して本格的に研究を行っている著書・論文はない。唯一 B. Brainerd (1989 [1993]) の研究があるが、劇史料に的を絞り 17 世紀初期からの貴重な初出例を発掘した功績は高いものの、1680 年代以降の用例調査は不十分である。1800 年を過ぎた時期で調査は終了しており、全助動詞縮約形の総数は 400 例強にすぎない。ともあれ、彼の研究、OED、筆者の研究により、これまでのところ、don't とその異綴りの初出は 1615 年頃ないしは 1625 年頃、doesn't のそれは 1674 年であり、半世紀の差はあるものの 17 世紀中であることが判明した。

しかしながら、両者の確立の時期となると話は別である。先行研究が一切ないため、筆者が実態調査に乗り出した。その結果、130 冊の日記・書簡史料から 5,774 例、OED の全例調査から 13,190 例、欧米の大学が無料で開放していた電子テキスト 260 点、LOB コーパス、FLOB コーパスの分析から 19,149 例、都合 38,113 例が収集された。たとえば、日記・書簡史料における出現状況は次表のとおりである。他の 2 つの史料においてもほぼ同じ分布を示している。

			1601-1625	1626-1650	1651-1675	1676-1700	1701-1725	1726-1750	1751-1775	1776-1800	1801-1825	1826-1850	1851-1875	1876-1900	1901-1925	1926-1950	1951-	Total
don(')t do n't do'nt dostn't	D	O			11	50	265	394	213	145	133	323	668	302	47	48	69	2,696
		V			1	1			3	1	2	7	7	1	5			
	Q	O				1	30	11	19	14	7	30	40	17	3	2	3	185
		T					2				1		2	1				
		V										1	1					
	Imp	O			3	5	62	78	61	24	37	53	139	54	17	4	5	547
		V										1	2	2				
can(')t cann't	D	O			4	88	149	259	58	24	24	52	233	154	18	The results here have not been tabulated. For the time being, please substitute Table 6, the analysis of the quotations in the OED[2].		1,087
		V				2		3	1			1	11	4	2			
	Q	O					1	1	1	2	2	7	6	5	1			26
		T																
		V																
won(')t won't wunt	D	O			9	25	107	69	37	15	8	35	99	92	14			524
		V						4	2			3	4		1			
	Q	O						1	4		1	3	4	2				23
		T						1			1	3	1		1			
		V									1							
shan(')t sha'n't sha'nt sh'ant	D	O				5	12	20	2	4	6	13	21	10	5			102
		V											4					
	Q	O							1				1					2
		T																
		V																
doesn't dosnt	D	O						2	4		1	5	34	30	10	4	17	111
		V											2	1		1		
	Q	O						2				1	3	2				11
		T								1			2					
		V																
didn(')t didna dinna	D	O						2	1		2	13	82	41	4	10	39	194
		V																
	Q	O									1	2	4	6			2	15
		T																
		V																
couldn(')t could'nt cou'dn't	D	O										4	42	30	3	The results here have not been tabulated. For the time being, please substitute Table 6, the analysis of the quotations in the OED[2].		83
		V											4					
	Q	O							1			1	4	3				9
		T																
		V																
wouldn't would'nt would n't	D	O						1				5	27	20	4			63
		V				1		1				1	1	2				
	Q	O											3	1				7
		T											2	1				
		V																
shouldn(')t should'nt	D	O										4	12	9				26
		V											1					
	Q	O										2	2	2				8
		T																
		V											2					
mustn't	D	O									1		10	10				22
		V											1					
	Q	O																
		T																
		V																
mayn(')t may'nt	D	O					1	2				2	2					7
	Q	O											1					1
mightn't	D	O												1				1
	Q	O																
daren't	D	O											2	2				4
	Q	O																
daredn't	D	O																
	Q	O																
needn't	D	O						1			1		6	7				15
		V												2				2
	Q	O																
oughtn't	D	O											1					2
		V												1				
	Q	O											1					1

注

D: 平叙文　　Q: 疑問文　　Imp: 命令文

O: “I remember <u>he doesn’t propose</u> going ’till Thursday next (1749 W. Shenstone, L27, 162) のような通常用法

T: “Well, he stutters as much as ever, <u>doesn’t he</u>?” (1786 B. Sheridan, D23, 91) のような付加疑問文における用法

V: “he promised to come and <u>doesn’t</u>.” (1855 A. Tennyson, L50, II 135) のような代用法

これらの結果から、(7) の新事実が明らかとなった。

(7) a. 助動詞の否定辞縮約形の確立は、同時期ではなく、助動詞の種類と機能に応じて徐々に

進行した。

b. 確立の順序は、doesn't を除く現在時制グループから過去時制グループと doesn't へという順序であった。両者には 150 年から 200 年の開きがある。前者は 2 子音連続を有し、後者は 3 子音連続を有するという特徴を持っている。この不快音連続のせいで、過去グループと doesn't は民衆に嫌われていたと考えられる。

c. 凡そすべての主要な縮約形が揃ったのは 1850 年頃で、丁度この頃に付加疑問文も確立した。

ここで、一つの疑問が生じる。doesn't が 19 世紀半ばに確立するまで、民衆はどのような語法を使っていたのかという疑問である。does not という非短縮形をいつも使っていたとは考えがたい。口語ではなおさらである。当然の予測として、doesn't が使えない以上 don't がその代役を果たしていたのではなかろうか。これが筆者のそもそもの出発点であった。そして、それは歴史的事実であった。

研究方法として、本論文では、日記・書簡史料と OED の別に分析を行った。まず、日記・書簡史料に出現する 3,428 例の don't を篩いにかけ、3 人称単数主語を有する 44 例を集めた。これと、doesn't の用例 122 例とを基に、文の種類、統語的特徴、書き手や出典の性質を通時的に吟味した。同様に、OED の引証部分に使われている 5,437 例の don't のうち、257 例が 3 人称単数主語を有する用例であることを突きとめ、doesn't の用例 732 例と、統語的特徴、書き手、出典を吟味した。2 つの調査史料から得られた結果に若干の誤差はあるが、両者を総合すると、(8) のような結果を提示することができる。

(8) a. 3 人称単数主語に呼応する don't (3SG don't) は、19 世紀後半の間に doesn't に凌駕された。それまでは、3SG don't の語法は 'vulgar'な英語に限られてはおらず、まるで法助動詞 I can't / you can't / he can't の如く I don't / you don't / he don't が使われた。

b. Doesn't が一般的でない以上、教育を受けた書き手でさえ 3SG don't の語法に頼ったことは至極当然であった。

c. 3SG don't の語法に特有の統語環境はなかった。主節においても従属節においても対等に使われ、自動詞あるいは他動詞への偏りもなかった。人称代名詞主語 *he/she/it* の用例が比較的多く観察された点と否定平叙文に偏っている点が目立つが、この語法に固有の性質であるとは考えられない。

d. 19 世紀中頃に doesn't が一般化するに伴い、3SG don't の語法と vulgar な語との共起が目立ち始めた。これは、3SG don't の語法が非標準であるという烙印を押され始めたことを意味する。小説において、登場人物の役柄付けにこの語法が利用されるようになったのもこの頃からである。ついに 20 世紀初期には、3SG don't は、卑俗で非標準の言語レベルで、あるいは会話調の語法として使われる語法となった。

e. 一方、アメリカ英語では、17 世紀初期に移民によってもたらされたであろう 3SG don't は、通常語法として根を下ろした。たとえば、Mencken (1919) は、doesn't はほとんど耳にすることはなく、3SG don't は教養ある語法にまでなっていると述べている。一部地域を除き、アメリカ英語において doesn't が確立したのは 20 世紀後半の間であった (Bloomfield & Newmark 1963)。イギリスより 1 世紀遅れの確立である。アメリカ英語における doesn't の確立がこのように遅かった理由は、本国イギリスでの確立が 19 世紀後半で

あったため、圧倒的多数の移住者たちには doesn't は馴染みがなかったためであると考えられる。

本章のテーマに関して、現代英語で he doesn't know を用いるところ、古い英語では he don't know が許されていたという断片的な言及が散見される程度であったが、本章により、闇に包まれていた時代の語法が詳らかになったと判断される。

第 III 章　有生または人をあらわす主語も持つ能動受動進行形の歴史

第 3 章では、形式は能動で意味は受身の、能動受動進行形を取り上げた。The house is building / Dinner is cooking / The book is printing に代表される能動受動進行形の主語特徴として先達の見解が一致している点は、有生の、あるいは人をあらわす主語はほとんど来ないという点である (Baugh 1951, Visser 1973, Denison 1993, 1998, Rissanen 1999)。実際、これまでに発見されている、[+Animate] / [+Human] の主語を有する能動受動進行形の総数は、20 動詞（あるいは 17 動詞）23 例（あるいは 19 例）である（Visser 1973 が挙げた用例に能動受動進行形であるか自動詞の進行形であるか微妙な用例が含まれているため、それらを減じた数値を丸括弧内に示した）。しかし、受動進行形が登場するまでは能動受動進行形が主要な表現であった以上、もしも [+Animate] あるいは [+Human] の主語が許されないとしたら、不便であったはずである。このような仮説を出発点に、日記 42 点書簡 69 点、都合 150 冊を越える日記・書簡史料の網羅的用例調査と分析を行った。

筆者が新たに発見したのは、20 動詞（18 動詞）24 例（21 例）である。論文では、OED の定義を基に、動詞を [±Animate] / [+Animate, -Human] / [+Human] / [+Animate or +Human] のいずれの目的語をとるかによって分類し、対応する能動受動進行形の用例を示した。たとえば、(9a) に示した OED の定義から、動詞 nurse は、「（病人に）付き添う、看病する」という意味であり、[+Human] の目的語しかとれないことがわかる。したがって、(9b) の I am nursing は、明らかに能動受動進行形である。nurse の自動詞用法ではない。また、(10a) の動詞 wean は、動物あるいは人を目的語にとり、「離乳させる」という意味をあらわす。自動詞ではない。したがって、(10b) は能動受動進行形であり、下線部は「離乳中の、幼く発育のわるい娘シャーロットのために」であると解釈される。

(9) a. "To wait upon, attend to (a person who is ill)." (*OED*[2] s.v. nurse *v*. 5a, 1736→)

b. 1843 S. Pamer, L48, I 419, and I wish I could come to Bayswater to witness the happiness of you all—but *I am nursing* to regain health for tomorrow— . . .

(10) a. "To accustom (a child or young animal) to the loss of its mother's milk; to cause to cease to be suckled. a. with obj. a child. . .　b. with obj. a young animal."

(*OED*[2] s.v. wean *v*. 1 *trans*., a: *c*960→, b: 1481→)

b. 1791 J. Woodforde, D21, III 271, Sent Mrs. Jeanes, <u>for her little puny Daughter Charlotte who *is* now *weaning*,</u> a Spring Chicken this Evening by Briton.

筆者の研究により判明した点は (11) のとおりである。

(11) a. 有生の、あるいは人を主語にもつ能動受動進行形は、教育を受けた人々や上流階級の人々を含め、さまざまな人々によって、また、多様な動詞とともに、1600 年から、受動進行形が確立した 1820-50 年にかけて使われた。

b. この語法は、単に個人のことばの癖ではない。

c. 先達の、この語法は歴史的に稀有であるという指摘は、あまりに一掃的すぎる。

こうして、先行研究によって発見されているよりも多くの書き手によってこの語法が使用されていること、教育を受けた書き手によっても使用されていること、また、単なる誤用とは見なせない程度にまでさまざまな動詞が使われていることが明らかとなった。用例総数は、先行研究によって発見された総数の 2 倍となった。この構造は、従来考えられてきたようには必ずしも稀有であるとはいえないのではなかろうか、単に用例発掘が十分でなかったことに原因があるのではなかろうかと結論付け、英語の史実の再考を促した。

先達に「稀有」だと思わせたのは、この語法が当時の文法の一部として認められていなかったためでなく、主として文学作品の研究に基づいた先達は用例に出くわすことがあまりなかっただけのことであろうと判断される。このように考えると、H. Poutsma が記述を撤回した事実が興味深く思われてくる。彼は、1919 年に *English Studies* 創刊号に載せた論文では、人を主語にもつ能動受動進行形は稀で、これまでのところ 2 例しかないと述べているが、1926 年出版の著書にこの論文を再録した際には、当該の記述は完全削除した。真意は誰にもわからないが、筆者と同様、この構造は決して稀有ではないとその間の読書によって気付いた可能性がある。

なお、本章には、能動受動進行形に動作主 *by*-agent が後続する構造もこれまで稀有だと考えられてきたが (Y. Olsson 1961, D. Denison 1998)、必ずしもそうではないことが述べられている。先行研究では 5 例しか見つかっていないが、筆者は、21 例を発見した。教育を受けた人々や上流階級の人々によっても使用されている。21 例中 20 例において *by*-agent は新情報であることから、能動進行形で表現するわけにもいかず、書き手は、能動受動進行形を使い *by*-agent を添えたものと考えられる。

第 IV 章　分詞の進行形の歴史

今日の英語では、いわゆる分詞構文は、動詞に ing 形を添えた 1 語で表現し、付帯状況を基本に、時、理由、条件、譲歩等をあらわすが、かつては (12) のような *being* Verb-*ing* の時代があった。第 IV 章は、日記 42 点書簡 69 点、都合 150 冊を越える日記･書簡史料の網羅的用例調査と分析に基づき、being going に代表されるこの現在分詞の進行形の歴史を扱った章である。

(12) 1661 S. Pepys, D10, II 128-29, This day the Portuguese Embassador came to White-hall to take leave of the King, he *being* now *going* to end all with the Queene and to send her over.

1661 S. Pepys, D10, II 149, He *being going* with a venison in his panyards to London, I called him in and did give him his breakfast with me.

中英語に登場したとされるこの語法は、先行研究にあっては、二重の ing 形のぎこちない響きのために、英語の歴史の中で極めて稀であったと考えられている (Jespersen 1931, Poutsma 1926, Visser 1973, Scheffer 1975)。しかしながら、S. Pepys の日記には、次の統計表が示すように、房をなして使用されている。これは、進行形の総数の 4.8% に相当する。

Being + V-*ing*

SV - being Verb-ing	22+1
being Verb-ing - SV	3+1
S being Verb-ing V	1
V being Verb-ing S	1
Total	27+2

Having been + V-*ing*

SV - having been Verb-ing	5
having been Verb-ing - SV	1

上の表から、分詞節は主節に先行される傾向があることがわかる。また、次の表から、分詞の進行形に使われる動詞は go が最も頻度が高いことがわかる。

go (12+1 times)
begin dress sit (2)
alter come finish lay make pay send speak strike (1) sweat (+1)

もしここで調査研究を終えたなら、この語法は Pepys 特有の稀有な語法として処理されることになったであろう。しかし、筆者は、他の日記・書簡史料においても、分詞の進行形が多数使用されていたという事実を突き止めた。20 人の異なる書き手になる 62+2 例が（＋記号の次の数値は、等位第 2 要素の例）発見された。この語法は 17 世紀－18 世紀が盛華期で、19 世紀に入ると衰退の道を辿っていった。

分詞の進行形は、分詞構文が確立する途上の構造だと述べる歴史家や、F. Bergeder (1914) のように、慌てて書かれたせいであると述べる歴史家もいるが、間違っているように思われる。分詞構文は 17 世紀には十分確立しているためである。また、Pepys の日記に頻出することは上に述べたとおりだが、彼は職場や外出先でその日のよしなしごとを不用な紙に書きつけ、帰宅後に日記用の紙に清書し直すほどの几帳面な人物であり（史料番号 D10, Vol. 1, xcvii-cvi）、時々日記文を読み返し修正もした（前掲、cii）。書き直せたはずのこの語法を書き変えなかったことには特別な意味があるように思われる。つまり、Pepys に限らず他の書き手においても、going 単独では「行きながら」、「行く時／行った時」、「行くので／行ったので」、「行けば」、「行くとしても」のどの意味であるか多義的であいまいなため、進行中の動作や取り決めや計画をあらわすために進行形式そのものを現在分詞形で表現しようとし、being going を使ったのではなかろうかと考えられる。

今述べた点と、現在分詞の進行形と異なり動名詞の進行形のほうは極めて稀である理由については、今後さらなる研究が必要であろう。本論文では、分詞の進行形は決して珍しい語法ではなかった点を報じた。

第 V 章 「～のふりをする」をあらわす seem の歴史

本章は、他の章と異なり、語彙研究である。研究の発端は、OED の動詞 seem の第一次派生語 seemer, seeming と第二次派生語 seemingly, seemingness は「ふりをする」という概念を有する一方で、

なぜ基体である seem 自体にはないのかという素朴な謎であった。OED の定義に関する限り、seem にはそもそも動作的用法は乏しい。「許す、授ける、快く...する」という意味が載せてあるが、これらには「ふりをする」の概念はない。派生語が「ふりをする」という概念を新たに獲得したとは考えがたく、結論として、後述されているように、OED には「ふりをする」の意味の seem が見落とされている可能性が高いと考えられる。

先行研究には、辛うじて 2 つの研究書にではあるが、「～のふりをする」という意味をあらわす seem への言及が認められる。A. Schmidt (1875) は W. Shakespeare の劇作品に 7 例、J. Wright (1905) は 19 世紀末の Man 島の方言に 1 例発見している。この事実は、1600 年から 1900 年頃までの英語にこの語法が存続している可能性を示唆している。実際、調査により、その存続は紛れもない事実であった。S. Pepys の日記には、今問題としている語法が、語彙別・構造別に次のように使われている。

Seem, *v*.				Seeming, ppl. a.	Seemingly, adv.
1st Person Subject		Non-1st Person Subject			
+ To-infinitive	+ Adjectival	+ To-infinitive	+ Adjectival		
14	16	8	6	8	4

ここで、Pepys は pretend や他の同義語を知っていなかったのだろうかという疑問が生じるが、そうではない。次の表が示すように、pretend を 14 回使っている。

affect to + infinitive	1*	dissemble to + infinitive	0
assume to + infinitive	0	feign to + infinitive	2
counterfeit to + infinitive	0	pretend to + infinitive	14
* affect to seem Adj			

seem のほうが好まれた理由として二点考えられる。一つには、次の表のように、pretend には「自ら～であると主張する」というもう一つの重要な意味があるため紛らわしかったのではなかろうか、もう一つには、pretend 等とは異なり、seem は形容詞をも従えることができたためであろうと考えられる。

Sense of pretend	1st Person Subject	Non-1st Person Subject	Total
'to feign'	8	6	14
'to profess or claim'	1	12	13

もう一つの疑問は、この語法は Pepys 特有の語法だろうかという疑問であるが、これもそうではない。用例の書き手は Pepys が突出しているが、第 4 代 Chesterfield 伯爵、Oxford 大学で神学博士の学位を取得した Re. W. B. Stevens も使用している。この語法は 17 世紀－18 世紀の文法の一部だった可能性がある。特に次の例文においては、命令文として使われていることに注目しなければならない。命令文は、動作的な意味の動詞にだけ許される。したがって、これらの seem は明らかに「ふりをする」という意味で使われている。

(13) 1748 P. D. Stanhope, L21, 65, The more you know, the modester you should be . . . Even where you

are sure, *seem rather doubtful*; represent, but do not pronounce, and if you would convince others, *seem open* to conviction yourself. | ?1772/?1773 P. D. Stanhope, L21, 381, Be wiser and better than your contemporaries, but *seem to take* the world as it is, and men as they are,

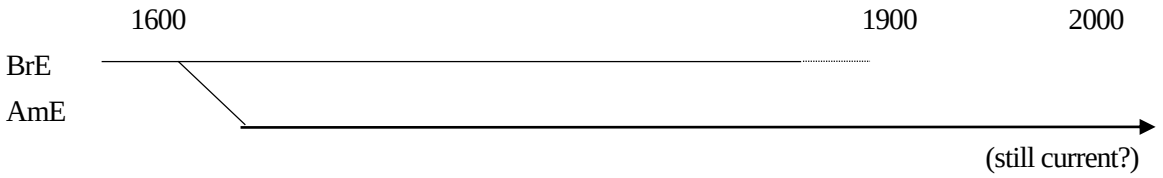
以上の事実から、筆者は、OED に、おそらく seem の定義番号 4 と 5 の間に、(14) のような定義を設ける必要を唱えた。seem の派生語が「ふりをする」の概念を有する以上、seem 自体に載っていなければならないからである。

(14) †To feign an action, character or the like; make oneself seem (*to* do or *to* be); assume an air; pretend. *Obs. rare*. exc. *dial*. ?Now *U.S.*?

本章における研究意義をまとめると (15) のようになる。

(15) a. 稀有だと考えられている語法が実はそうではなかったことを詳らかにした。
b. seem 自体に「ふりをする」の意味があったことが証明されたことにより、その第一次および第二次派生語、いわば seem の子や孫がその遺伝子を有している謎が解明された。
c. アメリカ英語に「～のふりをする」という意味をあらわす動詞 seem の用法が存続している事実が説明できる。

次の図のように、「ふりをする」をあらわす seem は、Elizabeth 朝時代に使われていたこの語法を、アメリカへの移住者が新大陸に持ち込んだのではなかろうか。一方、本国ではやがて使われなくなった。祖国では使われなくなったがアメリカでは使われ続けている語法は、「秋」の fall、「病気である」の be sick 等多々ある。seem もこの一例であるといえる。



最後に、なぜイギリス英語では「～のふりをする」という意味をあらわす seem が廃用になったかについて、次の 3 点を指摘した。

(16) a. seem は生まれつき不活性の、非動作的意味を持っていた。
b. seem の「ふりをする」の解釈は文脈依存的であった。
c. pretend (1412→), counterfeit (1548-1639), feign (1563→), assume (1602→), affect (1603→), dissemble (1634-1660) のような同義語が多々使われるようになり、seem はその役割を終えた。

第 VI 章　Not 後置型現在分詞、動名詞の歴史

最後に、第 6 章は、否定辞 not が後続する現在分詞・動名詞の語法 (以下、not 後置構造) の歴史を扱っている。対象となる構造は (17) の 8 つである。

(17) a. 単純形現在分詞 V-*ing not*
1660 S. Pepys, D10, I 215, To bed, *having not* time to write letters;

b. 複合形現在分詞 受動の *being not* PP

1660 S. Pepys, D10, I 322, In the morning to Alderman Backwells for the Candlesticks for Mr. Coventry; but they *being not done*, I went away;

c. 複合形現在分詞 完了の *being not* PP

1661 S. Pepys, D10, II 114, But they *being not come*, we went over to the Wardrobe

d. 複合形現在分詞 完了の *having not* PP

1660 S. Pepys, D10, I 5, There, *having not eat* anything but bread and cheese, my wife cut me a slice of brawn which I received from my Lady,

e. 単純形動名詞 V-*ing not*

1789 J. Woodforde, D21, III 94, When at last in great haste there came one—and the reason of its *being not* here before, was, that Raven at the Kings Head to whom I had sent a Note, had entirely forgot it.

f. 複合形動名詞 受動の *being not* PP

1775 J. Woodforde, D21, I 168, I went down to Sister Clarke's this morning and made her a visit, she is not at all pleased in *being not invited* to the Christening yesterday—

g. 複合形動名詞 完了の *being not* PP

1699 S. Pepys, L7, I 202, Between my comeing thus farr and the sealeing it, your 3d most unwellcome notice of your *being not gone* the 17th is come to hand.

h. 複合形動名詞 完了の *having not* PP

1713, J. Swift, L16, II 670, *Having not used* riding these 3 years, made me terrible weary; yet I resolve on Monday to sett out for Holyhead, as weary as I am.

not 後置構造が現代英語において稀であることは、G. O. Curme (1931), R. Quirk, et al. (1985), R. Huddleston & G. K. Pullum (2002) によって、多少の温度差はあるが、明言されている。しかし、彼らは統計的根拠を示していないため、念のために筆者が実態調査を行ったところ、予期せぬ結果が得られた。それぞれ 100 万単語からなる LOB コーパス、FLOB コーパスにおいては not 後置構造は稀であったが、1 億語からなる BNC コーパスでは、(17d)と(17a) の構造で 2 桁の用例が出現した。このことから、現代英語においてもなお、not 後置構造は現在分詞において、特に複合形において使用されている事実が判明した。そこで、この構造は単なる文法的誤りなのか過去の英語の名残りなのかを解明するために、歴史の旅に出ることとした。

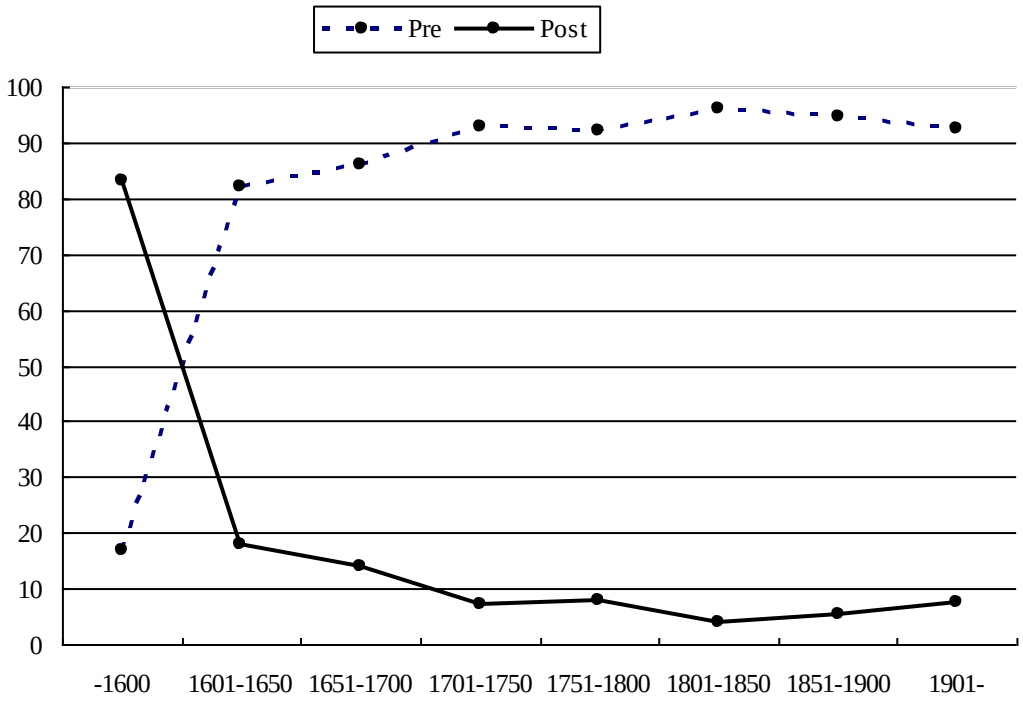
その前に、先達の歴史研究の押さえをした。not 後置構造への言及がみられたのは、W. Bullokar (1586), J. Priestley (1761), J. Söderlind (1958), A. Wada (1975) の 4 人である。Bullokar は、not は大抵、動詞や時制標識のあとに、また分詞の前に置かれると述べている。Priestley は、*being not* PP や *having not* PP は耳障りでよろしくないと述べている。J. Dryden の文法研究で知られる Söderlind は、脚注の中で、動詞的な coming not 形式が 1 例あったことを、Deloney 研究で知られる Wada は、現在分詞の being not の使用が 1 例あったことを報じている。いずれも、not 後置構造に対し消極的な見方をしている。

そのため、S. Pepys の日記に頻出することを既に知っていた筆者は、当初、not 後置構造は彼の日

記に特有の、稀有な語法であるにすぎないと考えていた。しかし、その後、他者の日記・書簡史料にも多くの not 後置構造が出現したため、ジャンルあるいは語法レベルに固有の構造だったかどうかを調べる必要が生じ、最終的に 130 冊の日記・書簡史料、10 種の電子コーパス、OED[2] on CD-ROM の全引証部分を分析した。その結果、稀有であると信じられてきたこの構造は、決して稀有ではなかったことが判明した。

論文において、まず、日記・書簡史料の結果を示した。たとえば、単純形現在分詞に対する not の前置と後置の競合は次のとおりである。17 世紀後半には not 後置構造が多く使われていることがわかる。

Period	Per 25 years				Per 50 years			
	Pre		Post		Pre		Post	
-1600	4	[3]	20	[1]	4	[3]	20	[1]
1601-1625	12	[7]	9	[1]	69	[40]	15	[4]
1626-1650	57	[37]	6	[4]				
1651-1675	550+6	[117+3]	100	[12]	839+7	[168+3]	135	[14]
1676-1700	289+1	[92]	35	[6]				
1701-1725	133+1	[52+1]	11	[4]	191+1	[67+1]	15	[4]
1726-1750	58	[28]	4	[1]				
1751-1775	76+1	[25+1]	5	[3]	246+1	[68+1]	21	[4]
1776-1800	170	[52]	16	[3]				
1801-1825	148	[53]	9	[3]	307+3	[98+2]	13+1	[7]
1826-1850	159+3	[65+2]	4+1	[5]				
1851-1875	121+4	[42+4]	7	[4]	146+4	[55+4]	8	[4]
1876-1900	25	[18]	1	[1]				
1901-1925	3	[3]	0	[0]	24	[20]	2	[2]
1926-	21	[18]	2	[2]				
Total varieties of vebs 292 Total number of examples 1,826+16 : 229+1								



not 後置構造に使われている動詞は 25 動詞で、とりわけ be, have, know, come, do and find に集中している。これらは、16 世紀中頃以前から英語動詞として使われている動詞である。換言すれば、新たに生まれた動詞は決して not 後置構造をとらなかったという意味でもある。

次に、not 後置構造と前置構造の間にほとんど意味の差はないこと、主語に対する分詞句の位置も not の後置と前置の使用に影響を与えていないことを述べた後、何が後置構造をとらせているのか、その要因を探った。一口で言えば、定形動詞の否定の様態である。下の 2 つの表が示すように、not 後置構造をとりやすい動詞として上に挙げた be, have, know, come, do and find は、遅くまで助動詞 do に抵抗した動詞である。つまり、これらは、am/are/is/was/were not, have/has/had not, come/comes/came not のような否定表現をとり続けた。この not の位置が現在分詞の否定形式に影響を与えたという考え方である。

否定平叙文における、助動詞 do を用いる否定文（表中‘do’）と用いない否定文（表中‘s’）の歴史的競合―本動詞 have の場合

	s	do	% do
16c	1	0	-
17c	38	0	0
18c	899	5	0.6
19c	614+2	5	0.8
20c	20	23	53.5

否定平叙文における、助動詞 do を用いる否定文（表中‘do’）と用いない否定文（表中‘s’）の歴史的競合―他の動詞の場合

	know		care		doubt		matter		mistake	
	s	do	s	do	s	do	s	do	s	do
16c	2	1	1	0	7	0	0	0	0	0
17c	762	182	33	19	234	60	10	0	6	4
18c	580	770+1	27	96	168	132	0	1	14	9
19c	369	936	33	131+2	76	39	9	35	14	2
20c	0	75	0	3	0	0	0	7	0	0

	come		do		find		meet		need	
	s	do	s	do	s	do	s	do	s	do
16c	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0
17c	110	68	45	37+2	36	78	16	14	10	3
18c	30	174+1	6	34+1	15	86	2	22	10	7
19c	6	141	0	60+1	3	60	2	23	7	6+1
20c	0	9	0	10	0	4	0	0	0	4

	say		see		love		question		stay	
	s	do	s	do	s	do	s	do	s	do
16c	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
17c	13	21+2	34	99+2	19	28	25	14	42	27
18c	18	69+1	23	228+1	5	53	33	20	1	116+1
19c	13	81	5	254+3	8	33	0	0	1	18
20c	0	7	0	28	4	2	0	0	0	1

	value		ask		fear		deny		go	
	s	do	s	do	s	do	s	do	s	do
16c	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
17c	18	8	2	8	10	15+1	1	9+2	54	52
18c	8	8	1	21	2	16	0	8	6	228
19c	0	3+1	2	26	3	9	0	6	1	163+2
20c	0	0	0	4	0	1	0	0	0	17

	hear		let		like		make		mind	
	s	do	s	do	s	do	s	do	s	do
16c	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
17c	32	47+2	4	7	17	94	13	27+1	6	13+1
18c	4	64	0	9+2	22	186	4	72	1	16
19c	5	42+1	2	11	7	387+1	0	66	0	50
20c	0	3	0	2	0	30	0	11	0	9

	move		remember		sit		speak		stir	
	s	do	s	do	s	do	s	do	s	do
16c	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
17c	0	4	9	34	4	5	16	18+1	18	11+1
18c	1	5	0	72+1	5	17	10	28	1	13
19c	0	5	0	60+1	2	4	2	35	0	2
20c	0	1	0	9	0	0	0	2	0	0

	understand		Total number of examples	
	s	do	s	do
16c	0	0	19	12
17c	26	40	2,150	2,706+45
18c	5	98+1	1,177	6,642+62
19c	1	90+2	744	7,460+51
20c	0	16	10	783+6
			Total varieties of verbs 1,102	
			Total number of examples 21,703+164	

定形動詞の否定の様態が not 後置構造に投影されたのではないかという考え方には証拠がある。第一に、完了の *have* PP や受動ないしは完了の *be* PP は、定形において not を助動詞の直後にとる。これらの複合形は、時制／相／態を有し、単純形よりも動詞性が強い。そのため、not 後置構造の比率が著しく高い点である。*having* PP の場合、17 世紀後半には、not 後置構造のほうが圧倒的に多く使われている。（表中、‘Pre’ は not 前置構造を、’Post’ は not 後置構造をあらわす。）

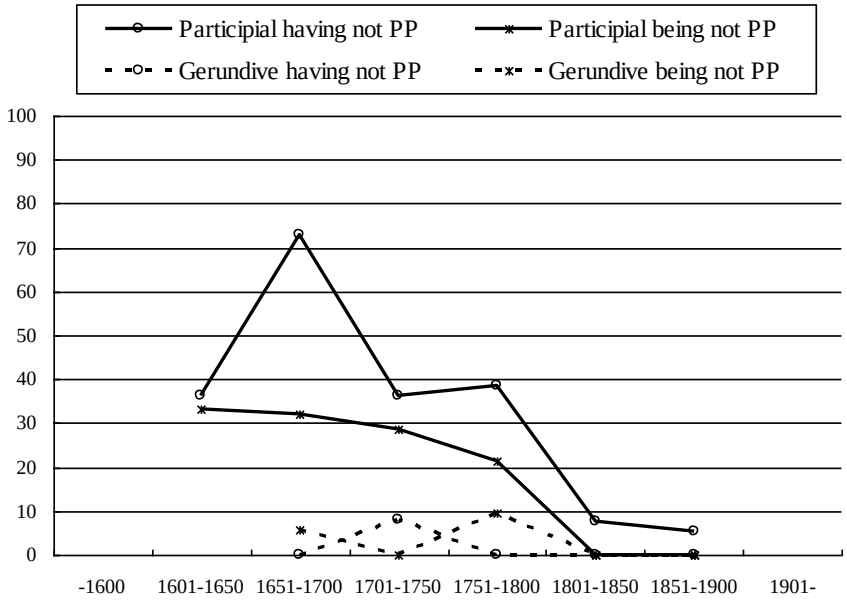
Having + PP

Period	Perfective having + PP			
	Per 25 years		Per 50 years	
	Pre	Post	Pre	Post
-1600	0	0	0	0
1601-1625	1	1	7	4
1626-1650	6	3		
1651-1675	8	59	26	70
1676-1700	18	11		
1701-1725	11	12	21	12
1726-1750	10	0		
1751-1775	6	5	16	10
1776-1800	10	5		
1801-1825	18	1	36	3
1826-1850	18	2		
1851-1875	14	1	18	1
1876-1900	4	0		
1901-1925	0	0	2	0
1926-	2	0		
Total	126 ： 100			

Being + PP

Period	Passive/Perfective being + PP			
	Per 25 years		Per 50 years	
	Pre	Post	Pre	Post
-1600	0	1	0	1
1601-1625	2	1	8	4
1626-1650	6	3		
1651-1675	53+1	25	74+2	35
1676-1700	21+1	10		
1701-1725	15	8	25	10
1726-1750	10	2		
1751-1775	4	0	22+1	6
1776-1800	18+1	6		
1801-1825	12+1	0	22+1	0
1826-1850	10	0		
1851-1875	3	0	6	0
1876-1900	3	0		
1901-1925	0	0	0	0
1926-	0	0		
Total	157+4 ： 56			

上の 2 つの統計表の 50 年単位の数値をグラフ化すると、次のようになる。2 本の実線で描かれたグラフのうち、最も高い頻度を示しているのが *Having* + PP、次いで *Being* + PP である。



第二の証拠は、たとえ完了の *have* PP や受動ないしは完了の *be* PP であっても、動名詞で使われると動詞性は低いため、not 後置構造の比率は低い点である。直上の 2 本の破線のグラフがこれを示している。根拠となるデータは次のとおりである。

Having + PP

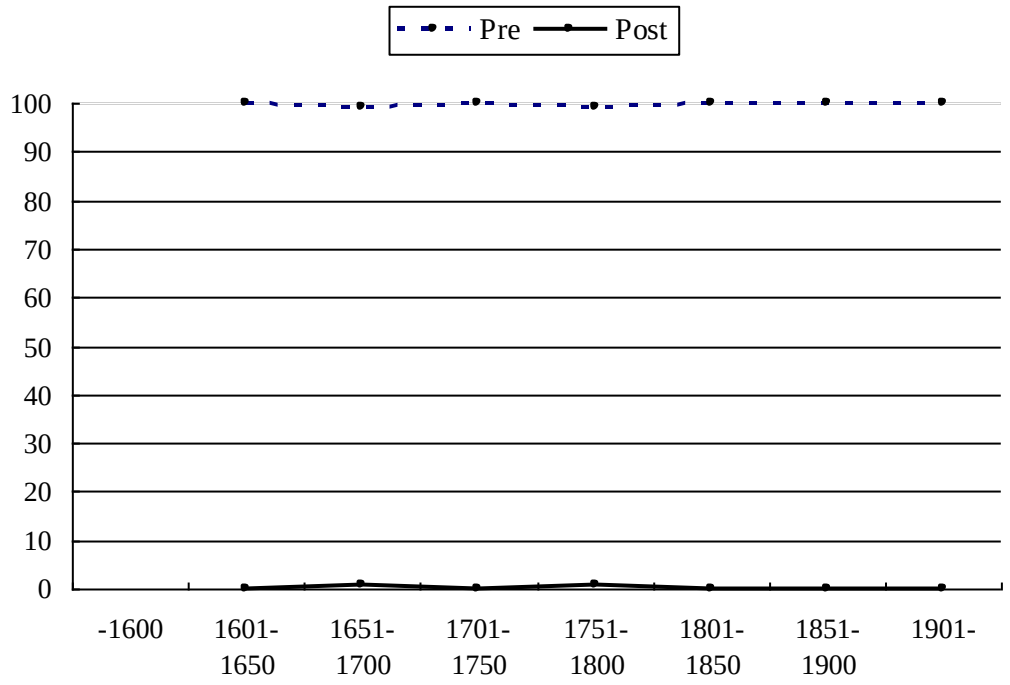
Period	Perfective having + PP			
	Per 25 years		Per 50 years	
	Pre	Post	Pre	Post
-1600	0	0	0	0
1601-1625	0	0	2	0
1626-1650	2	0		
1651-1675	7	0	14	0
1676-1700	7	0		
1701-1725	3	1	23	2
1726-1750	20	1		
1751-1775	18	0	31	0
1776-1800	13	0		
1801-1825	39+1	0	59+1	0
1826-1850	20	0		
1851-1875	26	0	35	0
1876-1900	9	0		
1901-1925	0	0	5	0
1926-	5	0		
Total	169+1 ： 2			

Being + PP

Period	Passive/Perfective being + PP			
	Per 25 years		Per 50 years	
	Pre	Post	Pre	Post
-1600	0	0	0	0
1601-1625	0	0	0	0
1626-1650	0	0		
1651-1675	11	0	16	1
1676-1700	5	1		
1701-1725	1	0	7	0
1726-1750	6	0		
1751-1775	2	1	19	2
1776-1800	17	1		
1801-1825	12	0	20	0
1826-1850	8	0		
1851-1875	2	0	10	0
1876-1900	8	0		
1901-1925	0	0	3	0
1926-	3	0		
Total	75 ： 3			

第三の証拠は、最も動詞性の低い単純形動名詞は、not 後置構造の比率が最も低い点である。下の統計表を視覚化したグラフは、地を這うグラフとなっている。

Period	Per 25 years				Per 50 years			
	Pre		Post		Pre		Post	
-1600	0	0	1	[1]	0	0	1	[1]
1601-1625	3	[3]	0	0	18	[14]	0	0
1626-1650	15	[12]	0	0				
1651-1675	221+1	[86]	2	[1]	397+1	[127]	4	[2]
1676-1700	176	[72]	2	[2]				
1701-1725	77	[42]	0	0	201+2	[77+1]	0	0
1726-1750	124+2	[54+1]	0	0				
1751-1775	132	[59]	1	[1]	259+1	[100]	2	[1]
1776-1800	127+1	[61+1]	1	[1]				
1801-1825	161	[82]	0	0	313+2	[120]	0	0
1826-1850	152+2	[69+2]	0	0				
1851-1875	100+1	[56]	0	0	149+1	[78]	0	0
1876-1900	49	[33]	0	0				
1901-1925	1	[1]	0	0	32	[20]	0	0
1926-	31	[19]	0	0				
Total varieties of verbs 299 Total number of examples 1,369+7 : 7								



以上の結果、日記・書簡史料における時期区分をはずした not 後置構造と前置構造の出現状況は次の表のようにまとめることができる。先行研究の言説と異なり、not 後置構造は決して稀有ではなかったことが確かめられる。

	Pre	Post
複合形現在分詞 *having* PP	126	100
複合形現在分詞 *being* PP	157+4	56
単純形現在分詞 V-*ing*	1,826+16	229+1
複合形動名詞 *having* PP	169+1	2
複合形動名詞 *being* PP	75	3
単純形動名詞 V-*ing*	1,369+7	7
計	3,722+28	397+1

次に、論文では、これまで述べた帰結が日記・書簡史料特有であるかそうでないかを検証するため、コーパス言語学で信頼されている 5 つの電子コーパス (Helsinki-DP, CEECS, Lampeter, Newdigate, ARCHER 3.1) と OED の分析結果を提示した。実際の博士論文には史料別・時期別・構造別に数多くの統計表を提示しているが、要約版では総合表を示すに止める。

電子コーパスにおける not 後置構造と前置構造の出現状況は次のとおりである。not 後置構造は決して稀とはいえないことが明らかである。後置構造がよく好まれた時期、現在分詞、特に複合形の現在分詞が後置構造をとりやすい点、単純形において後置構造をとりやすい動詞、動名詞はほとんど後置構造をとらない点も、日記・書簡史料で得られた結果と一致する。新たな点として、formal な英語で書かれた書き物を含む Lampeter コーパスにおいて多数の not 後置構造が発見されたことから、この構造は誤った語法ではなく、特に 16 世紀中頃から 18 世紀中頃にかけて文法の一部だった可能性が高いことを指摘することができる。

	Pre	Post
複合形現在分詞 *having* PP	41	27
複合形現在分詞 *being* PP	60	40
単純形現在分詞 V-*ing*	621+3	123
複合形動名詞 *having* PP	7	1
複合形動名詞 *being* PP	9	1
単純形動名詞 V-*ing*	316+4	2
計	1,054+7	194

OED における not 後置構造と前置構造の出現状況は次のとおりである。ここでも、日記・書簡史料や電子コーパスの分析結果と同様 not 後置構造は決して稀とはいえない点や、後置構造が頻出した時期、現在分詞、特に複合形の現在分詞が後置構造をとりやすい点、単純形において後置構造をとりやすい動詞、動名詞はほとんど後置構造をとらない点においても、前の 2 つの史料と同じ傾向が見られた。第 VI 章の冒頭で、現代英語の BNC コーパスに not 後置構造が使われていることを指摘したが、それらは文法的誤りではなく歴史に裏付けられた語法であることが確証された。

	Pre	Post
複合形現在分詞 *having* PP	65	17
複合形現在分詞 *being* PP	95+5	60+9
単純形現在分詞 V-*ing*	1,627+59	179
複合形動名詞 *having* PP	27	1
複合形動名詞 *being* PP	29	2
単純形動名詞 V-*ing*	461+11	9
計	2,304+75	268+9

さらにその次に、総 914＋10 例に上る not 後置構造の使用者と出典を吟味した。17 例について使用者、出典ともにまったく情報がつかめなかったが、これ以外は *Oxford Dictionary of National Biography, Encyclopædia Britannica, The Cambridge History of English Literature,* 信頼できる組織・機関のインターネット公式サイトを活用し、書き手の出生地、教育歴、主要な職業、生涯、書き物の性質について情報を入手することができた。教育を受けていても不自然な言葉遣いを、不学といえども洗練された語法を使うことのできる人物もいる。教育の程度は必ずしも good usage, bad usage の尺度になるとは限らないが、1 つの目安になると判断した。

具体的には、日記･書簡史料の英語においては、国王 Charles I、王女 Caroline のほか、伯爵、公爵等の 7 人の貴族によって、故意によらず not 後置型-ing 形が使われていることが確かめられる。また、使用者計 72 人中 36 人が Oxford 大学、Cambridge 大学、Gray's Inn 法学院、Middle Temple 法学院等の高い学歴を有している点、16 人が High Church English を用いる聖職者である点、当代きっての文人も not 後置型-ing 形を使っている点が判明する。

Helsinki コーパスには、not 後置型-ing 形使用者として高等教育を受けた者 4 名、聖職者 3 名が、出典として議会法案集や神学論文が含まれる。CEECS には、使用者として高等教育を受けた者 5 名、聖職者 3 名、国王と女王が名を連ねる。Lampeter には、使用者として高等教育を受けた者 17 名、聖職者 7 名、貴族 1 名が、出典として、布告、公判記録、法律・医学・物理学・地理学・政治経済・宗教・天文学を扱った堅い書き物が含まれる。ARCHER 3.1 には、高等教育を受けた者 3 名が使用者として、出典として、世界で最も歴史ある科学雑誌とされる *Philological Transactions* や、*Edinburgh Medical Journal* のような学術雑誌論文や官報が含まれる。not 後置型-ing 形は誤用ではなく、当時の文法の一部だった可能性が極めて高いことがわかる。小説からの 6 例のうち、2 例は会話部に使われており登場人物の特徴づけに使われている可能性があるが、4 例は地の文に使われている。

OED 史料では、not 後置型の使用者の観点から、伯爵、子爵、子爵夫人、男爵、準男爵の、合計 11 人の貴族によって、意図的でなく自然に not 後置型-ing 形が使われている。貴族ではないが、Sir の爵位を与えられた 13 人もこの語法を使っている。使用者計 105 人が Oxford 大学、Cambridge 大学、Middle Temple 法学院等の高い学歴を有している。39 人が聖職者である。このほか、重厚な劇・小説・詩・随筆・宗教散文など、文学史にその名を残す当代きっての文人も名を連ねる。因みに、Shakespeare が not 後置型をとらせたのは、Buckingham 公爵、元老院議員(Senator)の Brabantio, Vincentio 公爵代理の Angelo のように高い位の登場人物の台詞の中にである。出典に

関して、not 後置型は、多岐に亘る使用域において、堅く改まった英語が期待される資料においてさえ使われた。法律分野では、英国議会の制定法、政府公式文書 *State Papers*、海事裁判所で取り扱われた申し立てや罪状認否書、法学書、教会法に関する学術論文に、政治、経済、歴史、哲学分野では、英国史、政治史書、国王 James I の統治に関する論考、政治史の英語訳、統治者教育論、政治哲学書、政治経済学書、政治経済書の英語訳、国家統治体制についての随筆、歴史書、編年誌、歴史書英語訳、哲学史、哲学書、宗教・道徳論、哲学論文の英語訳、論理学の教科書に使われた。また、科学分野では、医学書、医学書の英語訳、衛生・健康論、発生学書、地球物理学書、物理学教科書、天文学論文、地球自然史に関する論文、細写術、数学書、植物学書、植物学書の英語訳、王立協会の学術論文誌に使用されている。さらに、宗教関係では、英訳聖書、説教集、教会史書、宗教散文、出エジプト記に関する六重の注釈に、その他の分野では、百科事典の記事、辞書定義、芸術論書の英語訳、バレー(舞踊の)教書、修辞本にも使われた。

現代英語のコーパスにおいても、会話の録音や小説の地の文に多用されているだけでなく、高い教育を受けた者によっても（5 名)、社会科学書･自然科学書･歴史書のような堅い学術的な書にも(23 例)、not 後置型-ing 形が使われていることが確かめられる。

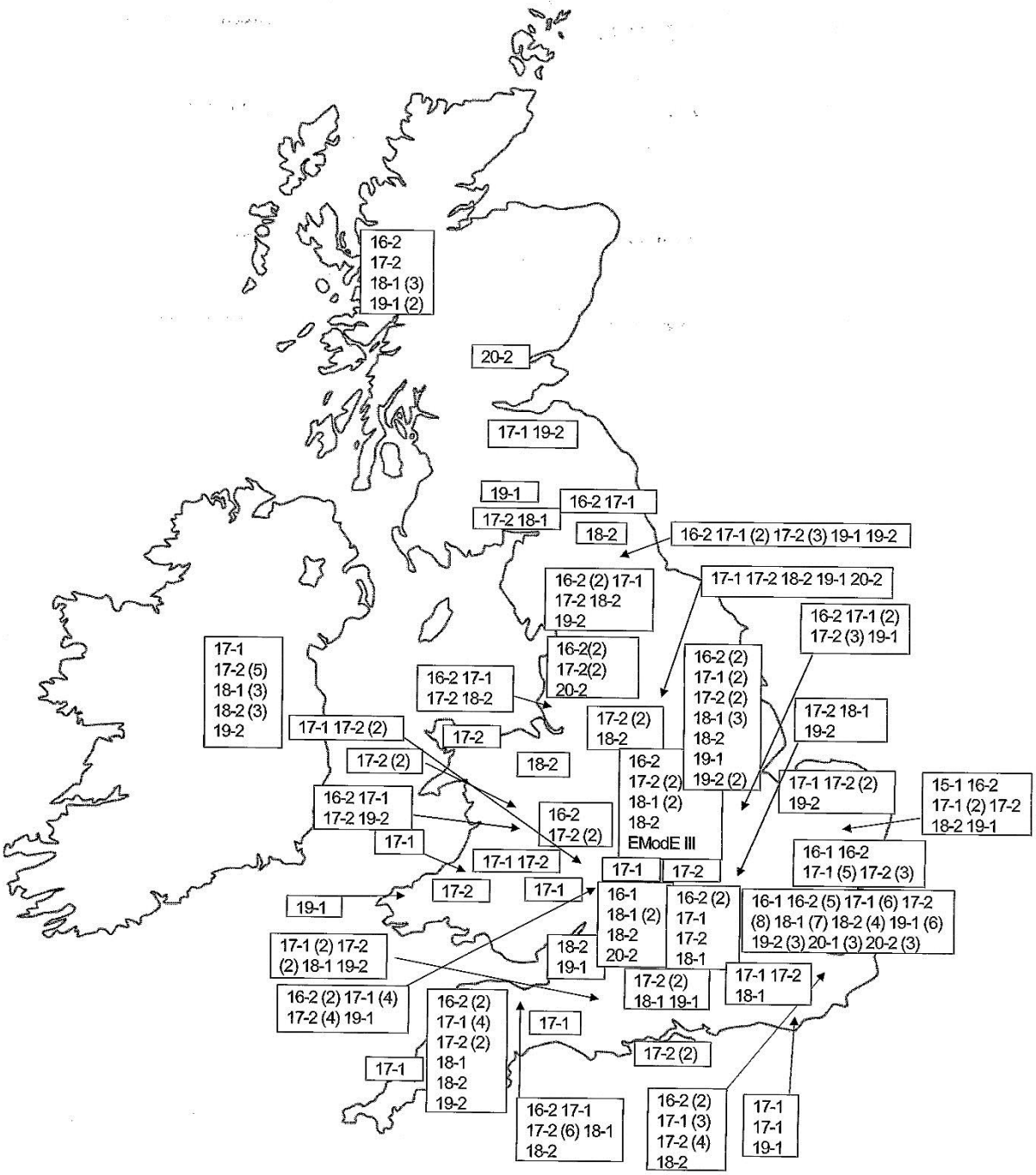
締めくくりに、not 後置型-ing 形使用者の生誕地をまとめた。人は幼少期に見聞きした言語を終生使い続けるわけではなく、また、他の土地に移り住んだ者もいる。そのため、成長のどの時点で not 後置型を身につけたか特定するのは至難の業である。そこで、本論文では、生誕地を一つの指標とした。not 後置型-ing 形使用者の生誕地は、地図上次のように表示できる（印刷上の理由により第 23 ページに掲載)。地理的な偏りもなく、歴史の中で、国中に広範囲に分布していたことがわかる。特定の地域で誕生した語法が徐々に全土に拡散したとは考え難い。

以上のように、not 後置型-ing 形の使用者と出典の性質の両面からの証拠と考察により、高い教育を受けた人物や改まった英語が期待される資料においても not 後置型-ing 形は使われたことが判明した。この構造は決して珍しい構造ではなかった。当時の文法の一部だった可能性が高い。少なくとも、誤用ではなかった。not 後置型がなぜ規範文法家 Bullokar や Priestley に疎まれなければならなかったのか謎であるが、彼らが個人的苦言を呈さずにはおれないほど民衆に使われていたと解釈すべきであろう。

第 VI 章の要点は次のとおりである。not 後置構造は、特に 16 世紀中頃から 18 世紀中頃にかけて文法の一部だった可能性が高く、個人の癖でもなく誤用でもなかった。ing 形の動詞性の強さに比例して not 後置構造の頻度が高かったこと (複合完了分詞 *having* PP, 複合受動分詞／完了分詞 *being* PP > 単純分詞 Verb-*ing* > 複合完了動名詞 *having* PP, 複合受動動名詞／完了動名詞 *being* PP ≧ 単純動名詞 Verb-*ing*)、Verb-*ing* + *not* に典型的に使われる動詞は否定平叙文において助動詞 do に根強く抵抗した動詞だったことに鑑みて、not 後置構造は否定平叙文における否定の様式が反映された構造であると考えられる。使用者と用例の出典の観点から、not 後置構造は、王侯貴族や高い教育を受けた人物を含む広くさまざまな人物によって、ブリテン島においてもアイルランドにおいても、公式か非公式かにかかわらず、学術的・非学術的にかかわらず、さまざまな文書において使われた。英文法の歴史を根底から覆す発見ではないにしても、現在分詞と動名詞の否定の歴史は再考する必要がある。

Not 後置型 ing 形の使用者の出生地

「17-1」は 17 世紀前半であることをあらわす。( ) 内は人数をあらわす。



白地図は，版権のない地図を利用。ダウンロード先は http://www.freemap. jp/item/europe/uk1.html.

結論

従来の英語史研究は、主として文学作品に基づき英語の変化と無変化の研究に多大な貢献をしてきた。これに対し、筆者は、伝統的な英語史研究を補完する形で、これまで主に非文学テキスト、とりわけ未踏の日記･書簡資料の言語分析を行ってきた。それらのうち、本論文においては、歴史的に稀有であると信じられてきた語法の中には実際には稀有とはいえない語法があることを実証し、史実の修正に貢献しようとした。

序論として、第 I 章では、言語変化の最前線を知る、消滅したはずの語法が存続しているかどうかを探求する、語法の時代的欠落を補う、未知または稀有な語法を発掘する上で、さらに語法に対する当時の生の証言を収集する上で、日記･書簡資料がいかに貢献できるかを説いた。その上で、第 II 章以降において稀有な語法の発掘に焦点を当てた。採り上げた語法は、3 人称単数主語に呼応する助動詞 don't の語法 (第 2 章)、有生の主語が先行する能動受動進行形 (第 3 章)、分詞の進行形 (第 4 章)、「～のふりをする」の意味を有する seem の用法 (第 5 章)、否定辞 not が後続する現在分詞・動名詞の語法 (第 6 章) である。

このように、5 つの事例研究を通し、これまで稀であると信じられてきた語法が、実際には稀であるとはいえないのではなかろうかと主張した。これまであまり人目に触れていないこれらの語法に日の目を当てた。本研究は、英語史の体系を根底から覆すものではないが、定説に対する再考を促す言語事実の発見を示した。筆者が主張したい点の一つは、英語史研究においては、文学テキストと同様に非文学テキストも分析する必要があるという点、理論研究を補うものとして伝統的史的研究は欠かすことができないという点である。埋もれた史実を発掘することは、歴史言語学と歴史言語学者の最も重要な任務の一つである。言語変化の説明は、共時的データの包括的にして徹底的な分析が大前提だからである。歴史言語学は、いわば言葉の考古学である。大量の文献が、今もわれわれの分析を待ち侘びている。本稿における発見が英語史実の訂正となり、英語史研究に一石を投じることができていれば幸いである。

（注、調査史料一覧、参照文献は割愛いたしました。）